



200歩めの天歩

1991年に創刊されたこの「天歩（てんぽ）」は、おかげさまで200号を迎えました。女性生産者を中心に編集していた第1号は、A3 サイズで両面白黒刷り。表面は発刊にあたっての思いや、栽培指針変更への理解を呼びかける文章、生産者の結婚報告、ご来園いただいた方からのメッセージなどがびっしりと並び、裏面はほぼ画像のみという構成でした。

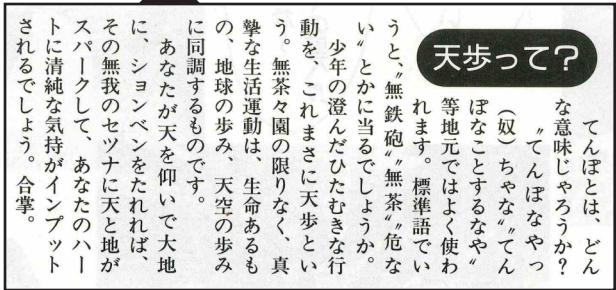
文章と画像を印刷会社に持ち込んで編集していただいていたのですが、今読み返してみても、粗削りながら「伝えたいこと、知ってほしいこと」にあふれる創刊号となっています。

48号（1999年）で初めてカラー印刷を導入。さらに 2005年には、編集作業も自社で行う体制へと移行しました。

一号一号歩みを進め、現在の発行部数は約 1 万部。全国各地の皆さんにお届けしていますが、これも無茶々園の産物をご利用いただく皆さんあってこそ。改めて感謝申し上げます。



天歩1号



1号には天歩についてこのように書かれています。

てんぽ作業の今昔

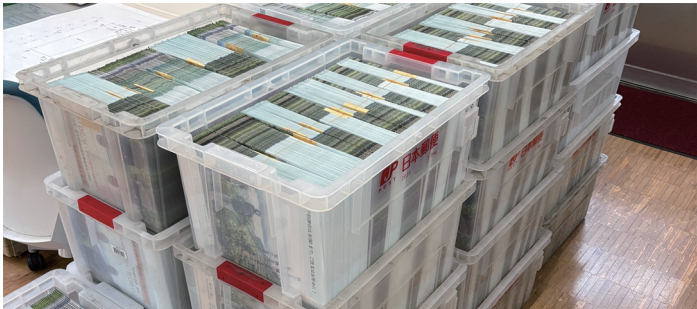
その昔、無茶々園では、お届けするみかんの送り状を生産者が夜なべして手書きしていました。今でこそ送り状は自動で印刷できるようになりましたが、「天歩」には現代社会では驚くほど手作業が多く残っています。封筒の宛名シール貼りに始まり、「天歩」と他のチラシを組み合わせる作業もすべて社内で行っています。

天歩の役割 変わることも変わらないこと

発行し始めて 30 年以上の「天歩」ですが、毎年 9 月号では生産者紹介を続けています。見返すたびに、髪型・体型の変化などはもちろんのこと、それにまつわるあれやこれやと何度見ても思い出話は尽きません。

もちろん、生産者の風貌の変化だけでなく、たとえば 57 号（2001 年）には「今どきの若者、百姓を目指す」と題した、農業研修生から独立する森下孝さんと、受け入れ農家の宇都宮利治さん、2 人の文章が掲載されていたり、台風やカメムシの発生、あるいは豊作といったその段々畑の状況に加え、海の様子や明浜の暮らしぶり・文化など多種多様な記事で構成されています。気負っているわけではありませんが、「天歩」は無茶々園の歴史を記録しています。

SNS が主流となり、紙や郵送料などのコストが上がるなか、今まで通りとはいかないかもしれませんが、これからも変わらず明浜の日常と段々畑の様子、生産者の思い等を皆さんに知っていただける機会として、大切にしていきたいと思っています。



発送前の天歩。発送できるまで気が抜けません

天歩とともに歩んで



無茶々園最初の実験園

無茶々園創立メンバーの 1 人、片山元治の妻であり、機関紙「天歩」の編集メンバーでもあった片山恵子さんに書いていただきました。

無茶々園は 50 年以上、天歩は創刊から 30 年以上経ちました。当時はどちらもこれほど長く続こうとは思ってもみませんでした。傷のない、見栄えのよいみかんを大量生産するために、より多くの化学肥料と農薬の使用が必須と考えられていた時代でしたから。数人の農業を始めたばかりの若者が言う農薬なしの無茶苦茶な生産法は、指導団体の農協や役場関係者、地域の経験豊かな先輩方にとっては無謀きわまりない。言っても聞きそうにもない態度に、「なんち、てんぽなやつちゃ（何て無鉄砲なやつらじゃ）」と。案の定、大量の病害虫や大干害、大型台風の大樹まで枯らす甚大（この言葉の意味を理解したのはこの時）な被害には、もは

無茶々園とのこれまで そしてこれから

無茶々園と出会ってから 40 年近くなるでしょうか。工夫を重ね、長い年月をかけて発展し続けられていることをとても嬉しく思います。出会わせてくださった方を抜きには語れない歴史ですので、まずはその方ことから始めます。もうお亡くなりになった橋本明子さんです。全国の消費者と生産者をつなぐ活動や、世界有機農業研究会に参加するほど有機農業運動もされていました。その後茨城県の八郷町に家を建てて移住し、消費者を持つ生産農家になりました。橋本さんには、牛など動物も飼って野菜作りをしている複合農家や、米農家、乳牛生産者、果物農家など、いろいろな方々を紹介していただき、お米の農作業に連れて行ってもらったこともありました。紹介先の一つが、無茶々園で、ぜひ応援しつつ美味しいみかんをいただきましょうという話になりました。

無茶々園の柑橘類とちりめんは、はじめは生協の仲間に声をかけて共同購入し、皆にうちまで取りに来てもらっていました。最初の頃は今ほど柑橘の種類が多くはなかったと思うので、皆で取っていたのは早採りみかんと温州みかんだったかと思います。生産者の方に来ていただいて、交流したこともありました。きちんと写真や御礼状を送らなかったことは今でも申し訳なかった思い出します。ごめんなさい。

その後柑橘の種類が年々増え続けて、みかん類がない時期は年間 3 カ月ほどでしょうか。うちも、子どもたちも孫たちもみかんなしにはいられない質で、10 月の早採りみかんから、ほぼ 2、3 週間に 1 回ほどいろんな種類のみかんを送っていただいています。

やこれまでかと。行く先が見えなくなった時に、いつも支えて下さったのは街の生協や消費者団体、市場では見る事もない見栄えのよくない果実や大量のジュースの買い取り、共生基金ともなった資金援助など。また、ジュースの加工やみかんの品種、生産の仕方には、その道の専門の沢山の先生方に暖かい指導を頂きました。今さらではありますが、ずっと見守り支え続けて下さった方々に心からお礼を伝えたいです。本当にありがとうございました。

「天歩」を始めた私達も、後期高齢者になって次世代に生産を託し、今は町外や県外から移住してきたたくさんの若くて優秀な職員や、外国人実習生達が生産ばかりでなく事務、加工、選果、老人施設などで働いてくれています。孫世代は方言を話す子も少なくなり、「てんぽ」も死語になりそうですが、いい意味で天へ歩んでいけそうです。



天歩編集メンバー（2001 年頃）



無茶々園と消費者の交流会の様子

早採りみかんの時期が来るのが待ち遠しくなります。みかん大好きな次女一家は、今年はじめにオーストラリアに帰国したので、とても残念がっています。向こうにももちろん柑橘類はありますが、無茶々園のように美味しくはないからです。無茶々園からは、真珠のネックレスとピアスのセットも購入し、子どもたちに贈りました。耳がかぶれないと言って、ピアスをいつも付けています。

いつまでも無茶々園を応援していますし、私が生きている間はいただき続けますね。子どもたちも食べ続けると思います。これからもよろしくお願いします。

東京都在住 須摩智佳子

天歩 200 号を迎えるにあたり、古くからの消費者の方にも無茶々園とのかかわりを振り返っていただきました。ちなみに、文中の「橋本明子さん」は 100 号記念の時に寄稿してくださった方です。インターネットなどない時代には、無茶々園を知る機会は消費者運動などを通じてということが多かったようです。こうして続いているおつきあいを、これからも大切にしていきたいものです。

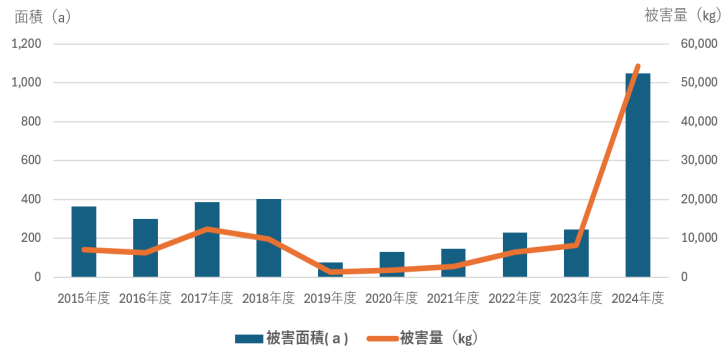
柑橘畑とイノシシ



ワナにかかり暴れるイノシシ

山と海に囲まれた自然豊かな町・明浜。およそ 2,500 人の人々が暮らす小さな町ですが、ここに住んでいるのは私たち人間だけではありません。朝には鳥のさえずりが響き、民家の軒先には猫が寝そべり、夜道はタヌキやハクビシンが横切ります。柑橘畑にはカメムシやカミキリムシ、鹿やイノシシなどの頭を悩ます存在も。

イノシシは周知の通り力が強く、時おり市街地にも現れ、大ニュースになっています。近年、無茶々園のある地域ではイノシシによる柑橘被害が増加しています。野生動物が害獣になる瞬間は人間に害を与えたとき。昨年はみかんが少なかったうえに、主食となるどんぐりなどの食料が山に少ないのか、みかんを食べられたり、木をへし折られたり石垣を崩されたりと特に被害が目立ち、無茶々園独自の調査では 2015 年からの調査で最も多い、例年の約 8 倍の 54,340 kg の柑橘が被害を受けました。昨日まで順調に実っていた柑橘が朝見るとすべて食べられて畑を荒らされるのには農家にとってはこれ以上ない、やるせない気持ちになります。「イノシシに食べられて収穫するものが無くなった」という悲しい言葉を何度聞いたことでしょうか。



被害調査グラフ(イノシシ害)

なぜ被害が増えるのか

一方で被害の原因として人間が害獣を増やしてしまっている側面もあります。かつては丁寧に手入れされていた山林や柑橘畑も、高齢化や担い手不足によって管理が行き届かなくなり、放任状態になることが少なくありません。そうした場所は草木が生い茂り、イノシシにとっては格好の隠れ場所となってしまう。被害が多い畑や地域では電気柵や鉄製のワイヤーメッシュで畑を囲ったり、様々な対策をしていますが、すべてを防げるわけではありません。一度人間が手をいれた山林や畑は、荒らすことなく適切に管理し野生動物が人里に降りてこないようにしないといけないのです。



畑に張り巡らされた鉄筋柵

狩猟の話

そんな害獣のイノシシですが、狩猟免許を持っている猟師が捕獲しています。無茶々園の生産者の中にも自ら銃を持ち、山に入ってイノシシを仕留める者が何名かいます。この捕獲したイノシシはどうなるかという、焼肉やしし鍋にいただきます。猟師の中にはししラーメンを作る者も。ジビエと呼ばれる野生動物の肉は「獣臭そう」「固そう」といったイメージがあるかと思いますが、しめる技術が上手ければ上手いほどそれらはほぼ感じません。みかんを食べているからか猟師の腕がいいからか。多分そのどちらもですが、とてもおいしいのです。



しし鍋用の猪肉

供養碑に込めた想い

無茶々園の農家兼猟師でもある宇都宮幸博さんは、今年の 4 月「鳥獣供養碑」を建立しました。「毎回、罠にかかった動物に銃を構えると、目が合って、まるで察したかのように暴れるのです。害獣といえど、命を頂くということに変わりはない。供養を兼ねて祀りました」と語ります。

時に動物による被害に悩まされ、時に自然の厳しさに翻弄されながらも、この地で柑橘を育て続けています。もちろん人間都合ですが知恵と技術を尽くして栽培を行う、自然とともにある農業の姿がここにはあるのです。



梅から果実の成熟を考える

四国地方は 6 月 8 日に入梅となりましたが、梅雨の名前のとおり、ちょうど梅の収穫時期と重なります。今年の梅はよく成っており、連日収穫したばかりの梅を選別して袋に詰めたり、梅干しの漬け込みを行ったりと、追われるように時間が過ぎていきます。明浜では柑橘類の生産量が圧倒的に多く、梅は補完的に作っている作物なのですが、収穫や果実の取り扱いが柑橘とはかなり違うなど毎年この時期に実感します。収穫に適したタイミングが短く、青梅として出荷できるのは 1 週間程度、その後は梅干し用としていきますが、これも次の 1 ～ 2 週間程度で終わってじきに熟し切って落果していきます。また収穫後の果実も長く保管しておくことはできず、すぐに出荷するか梅干しに漬け込んでしまわなければいけません。



梅干し漬けの様子

果物が熟する仕組みは、クライマテリック型、非クライマテリック型の 2 種類に分けられます。果実が肥大して成長したのちに訪れる成熟期の呼吸のパターンと、成熟に関与する植物ホルモンであるエチレンの生成量が違いを生み出します。クライマテリック型では果実の呼吸量とエチレンの生成が急激に増加し、糖や香り、アミノ酸の増加、酸味の減少、果実の軟化や着色といった成熟現象が一気に進みます。

おれんじクラブ



「先生、教えてー！」
夕方、明浜中学校の教室の一角から、可愛い声聞こえます。ここは、中学校の空き教室を活用した学童保育「おれんじクラブ」。放課後を安心して過ごせる、地域の子どものための大切な居場所です。

かつては、放課後の子どもたちを近所の大人や祖父母が見守るという、地域のつながりがありました。しかし、共働き世帯の増加や核家族化が進むなかで、学童保育は今や欠かせない「子育てのインフラ」となっています。そうした社会の変化の中で、明浜

梅、キウイフルーツが典型的なクライマテリック型であり、リンゴや桃、バナナ、マンゴー、柿などはやや穏やかですがこのグループに入ります。“クライマックス”が語源でもあり、まさに劇的な成熟を迎えるのです。

一方の柑橘類は非クライマテリック型。ほかにブドウやイチゴがこのグループにあたります。呼吸やエチレン生成の急激な増加が起こらず、ゆっくりと時間をかけて成熟していきます。収穫適期の幅が広く、各作業にも余裕を持って取り組めるため、柑橘産地としては梅の性急さが際立って印象に残ります。ただ、クライマテリック型果実ではバナナやキウイのようにあえて成熟前に収穫を行って貯蔵し、人為的にエチレンを処理して出荷適期をコントロールする追熟手法がとれますが、非クライマテリック型は収穫後にはあまり追熟が進まないため樹上で成熟を待つ必要があります。柑橘でも冬の品種は貯蔵しながら出荷していくことが多いですが、減酸や着色などの部分的な追熟もありつつ、基本的には寒波や鳥獣害を避け、樹の着果負担を軽減するためと言えます。



伊予柑の貯蔵の様子

さて、今年の梅は持ち直して豊作基調になりましたが、柑橘の様子はどうか。昨年は極めて不作でしたので、セオリー通りに考えれば花ばかり咲いて新芽が出にくい状況を想定していました。しかし、この春は花も多いものの新芽の発芽もあり、思ったよりもバランスの良い状態になっています。梅雨明け以降も台風や干ばつ、カメムシと心配事は続きますが、まずは順調な収穫を期待できる出足となっています。

に学童が誕生したのは 2015 年 4 月。社会福祉協議会から無茶々園の福祉事業部門が運営を引き継ぎ、現在に至ります。

中学校という場所を活用したことで、卒業していった先輩たちとの交流が続いているのもこのクラブならではの魅力です。一方で授業中には大きな声を出せないという制約もありますが、その時間は宿題や読書に集中する、静かなひとときになっています。スタッフには教職や保育の経験者もあり、学習支援が充実しているのも特色のひとつ。学童で宿題を済ませて帰ってくるので助かっている、と話すご家庭も多いようです。子どもたちとスタッフとの間には、先生とも親とも違う、あたたかく絶妙な関係が育まれていて、そのやりとりに思わず笑みがこぼれることも。学校と家庭のあいだをゆるやかにつなぐ、心地よい空気が流れています。

もちろん、おれんじクラブにも、人手不足や遊び場の確保、災害時の対応といった課題はあります。それでも、子どもたちと地域の希望がある限り、この場所を守りたいと願っています。子どもを支えることは、地域の未来をつなぐこと。また子どもたちの成長を見守ることは、植物を育てる農業ともどこか重なります。自然の恵みと、人の手のぬくもり。それらに支えられながら育つ子どもたちのそばに、これからも地域みなさんと共にありたいと思います。